

## 科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 27 年 6 月 11 日現在

機関番号：32644

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2012～2014

課題番号：24500297

研究課題名(和文)映像アーカイブを介した地域のコミュニケーション環境創出に関する研究

研究課題名(英文)A Study on local communication environment creation through the film archive

研究代表者

水島 久光(MIZUSHIMA, HISAMITSU)

東海大学・文学部・教授

研究者番号：30366075

交付決定額(研究期間全体):(直接経費) 4,200,000円

研究成果の概要(和文):本研究は、映像アーカイブについて、地域における活用という観点からその存在意義に光を当てるものである。これまでの三年間で、主に横浜、神戸、新潟、北海道夕張市、仙台を拠点とした東日本大震災被災地域など国内複数の地域を対象に、各々で試みられているアーカイブの構築・活用に関わるプロジェクトを具体的に支援し、それらの活動の意義をコミュニティ・デザイン/ソーシャル・デザインの観点から評価を行ってきた。さらにそこから生まれた知見の相互連携、人材交流、技術的・知的基盤のあり方を検討し、記録と記憶の関係を生態学的に捉える新しい「アーカイブ学」の理論的アプローチを進化させることに到達した。

研究成果の概要(英文):This study verifies to the significance of existence about film archives from a point of view of the utilization in the area. I supported a project to be concerned with construction of the archive tried in each for Yokohama, Kobe, Niigata, Yubari, the domestic plural areas including the Great East Japan Earthquake disaster area based in Sendai mainly, in three years, evaluated significance of those activity from the viewpoint of community design / social design. Furthermore, I examined mutual cooperation of the knowledge born from there, human resources interchange, the way of the technical intellectual base, and I evolved the new theoretical approach of "archive studies" to understand a record and relations of the memory ecologically.

研究分野：社会学、情報学

キーワード：地域映像アーカイブ コミュニティ・デザイン 集合的記憶 ミクロストリア 風景の政治学 デジタル公共圏

### 1. 研究開始当初の背景

本研究の背景には、まず研究代表者(水島)が以前から取り組み、蓄積してきた映像アーカイブに関する個別研究成果を体系化する必要性があった。

個別研究の主なものとしては、2005年の「戦後60年」を機に開始した放送番組アーカイブの検証、2006年から始めた鹿児島県大隅半島における「第六垂水丸遭難事件(1944年)」に関する証言収集とアーカイブの構築、北海道夕張市の石炭博物館における映像資料の保全と活用、戦前に流行した9.5mmフィルム(パテ・ベビー)のアマチュア映像の発掘とその映像史における位置づけの探究の4つが挙げられる。

デジタル化は、かつて“集合的「記憶」の公的補完物”であった「記録」の位置を180度変えた。こうした転換は、「アーカイブ」の語義自体をも揺さぶり、メディアのネットワーク化とともにこの語が人口に膾炙されていく流れを生んだ。アーカイブ研究の体系化の必要性は、こうした新しい環境下でのメディアの担い手問題を提起し、そこで「地域」は、ナショナル(トップダウン)からコミュニティ(ボトムアップ)へと、公共圏の構制を読み替える重要な概念として位置づけられる。

こうした観点に立つと、この研究は、特定テーマによるナショナルなアーカイブの映像の切り出しを行う。具体的には地域における放送アーカイブの活用という実践的課題に発展し、この研究からは、地域における「記憶」と「記録」の関係を解く、理論の必要性が提起される。また、ここからは、産業の盛衰、あるいは財政破綻という歴史的トピックが異なる地域間をつなぐアジェンダとなりうるかという問い、また、ここからは、メディアの遍在性から地域間の研究連携に問題が開かれていく。

そこに2011年3月の東日本大震災が発生した。超広域かつ複合・複雑化した被災状況は、事態の推移・変化とともに同時進行的に記録を残し、また人びとの認識の記憶化・伝承(風化、風評も含む)に積極的にメディアが関与していく必要性を強く認識させた。この課題においてもこれは強く意識されるとともに、各地域単位で「記憶」と「記録」の関係を問うプロジェクトが生まれ、それらが支援のネットワークを形成していく流れとなり、そこに、この知見が活かされるべき切実なる状況が現れたのである。

### 2. 研究の目的

したがって、本研究においては、これまで個別に行われてきた「地域アーカイブ」に関する実践と研究の、(1)連携の相を見出し、(2)実際に関係者の交流と知見の交換の場を作りだしていくことが目的とされる。そうした「運動」に主体的に参加していくことから、(3)それらを支える「理論」的のタームを見定め、(4)さらにはそこから技術的、方法論的知見を蓄積していくことを目指す。

### 3. 研究の方法

まず本研究開始以前から取り組んで来た、各地域におけるアーカイブに関する実践と研究(～)を推進していくことが基本的条件となる。その中から「連携の相」に関わる複数の仮説を立て

ることを契機として、各地域のプロジェクトの特性と課題を見極め、その類似例を全国に求めるリサーチを行う。

そこから「地域映像アーカイブ」活動の担い手の相互交流の場をデザインし、一方で、その仮説の立案から導き出されるタームを、隣接するディシプリンからの援用を図るかたちで精緻化していく。そして最終的には、それらを理論・実践を往還していく循環的モデルとして示すことで、市民レベルの「記憶」と「記録」を結ぶ活動が、新しいデジタル社会における、「公共圏」の説明原理として提示される。という手順を踏んでいく。

研究初年度(2012年度)は、この個別テーマのうち特に(夕張プロジェクト)と(パテ・ベビープロジェクト)について、総括的な研究を行うと同時に、(放送アーカイブプロジェクト)を媒介に、そこから見出された地域映像分析のキーワードである「風景」の亡失を、東日本大震災の被災地の課題と重ね、連携の相を見出していく研究を行った。また(大隅プロジェクト)の経験をベースに、横浜を拠点に市民参加型アーカイブの構築に関する検討を進め、諸プロジェクトの市民主権モデルを支えるタームとして「地域の肖像権」概念の精緻化を図った。

二年度目(2013年度)は、初年度の実績を踏まえ、「アーカイブとアーカイブをつなげる」をメイン・コンセプトに、理論的には4つの「連携の相」を出版物、論文、講演などを通じて社会的に提示するとともに、各地域における取組を支える大学がその連携のつなぎ目となりうるとして「大学・地域連携アーカイブシンポジウム」を横浜、神戸で開催。東日本大震災被災地域における実践的研究に関しても、東北大学と関係を強化し、福岡・熊本・鹿児島など九州地域とともに、交流の場を広げる取組みに着手。理論的タームとしては、テレビ時代の「集合的記憶」を反省的に捉えることによって、その歴史性・記号論的特性を明らかにする作業を行った。

三年度目(2014年度)は、「連携の相」媒介する各地域映像アーカイブの参照関係が、さらに運動体としてどのように再帰的に自己を成長させていくか、そのシステム的特性を明らかにしていく方向に踏み出すことになった。特にこの運動体としてのアーカイブ・モデルには、その成長を支える「三つの極」が存在するとの仮説を示すことで、アーカイブという概念と隣接諸学域との関係を明らかにしていった。その中でも、歴史学、教育学、システム論、認知科学等の各領域との理論的越境(援用可能性)を検討し、論文化あるいは実践(ワークショップ)として示すことは、アーカイブが学際的なソーシャルデザインの核となる概念として機能することを表しているといえる。

### 4. 研究成果

#### (1) 各個別研究プロジェクトの進展

2011年度中に先行して申請し、許可を得ていた“研究のためのNHKアーカイブスの視聴資格(「NHKアーカイブストライアル研究第三期」：助成金無)”を活用し、東日本大震災と放送アーカイブの関係に関する研究に着手。そもそもの素材の

少なさや、三陸の「風景」描写が地域経済（エコノミー）と人びとがそこで生きる環境（エコロジー）の界面として表象されていることを見出した。

その結果を受け、震災前の「風景」を記録した映像を被災地の人々の復興に役立てる活用企画をNHK放送文化研究所とともに立案（へ）

その一方で、2013年度にはNHKアーカイブスの「学術機関との連携」による切り出し、活用の計画（「番組eテキスト」）に加わり、沖縄、水俣のドキュメンタリーを素材とした試行授業に参加。またそれまで実践してきた夕張市での研究を発展させるために「地域での公開」の方法論を検討。さらには2014年には既に公開されている素材、データを用いた現在の制約下での「プレ活用」の可能性の追求をいくつか行った。

本研究以前に着手していた戦争関連番組の研究も継続して行い、NHKのこのテーマに対する取組（制作数と番組傾向）の変化を経年で追うことができた。その成果は（残念ながら採択には至らなかったが）2014年度後半に開始した「戦後70年研究」の素材として活かされている。

また、放送映像を地域の公共機関に寄託し、活用している事例の収集も行った。しかし福岡市総合図書館において地域放送局との大規模な連携が為されている他は、上田市と信越放送、明石市とNHKなどの個別関係がみられるにとどまった。

これらのリサーチによって、ナショナル・レベルで構築された大規模な公的アーカイブの中に、本研究が志向する「地域」をベースとしたアーカイブの素材群の存在の確認を進めることはできたが、この両者をつなぐことの困難さが一層浮き彫りとなり、組織的な手法開発スキームの必要性がクローズアップされた。2015年5月現在この問題については、早稲田大学、法政大学等の研究者との協働で検討グループを構成し、ひきつづきNHKとの折衝に当たっている。

大隅から始まった地域の「記憶」と「記録」を結びつけていく実践活動は、各地で行われている類似事例の収集へと展開。2012年度は、上田市（長野大学が中心となって進めている「蚕都上田プロジェクト」）川口市（市の情報教育センター「メディアセブン」）を中心に行っている映像ワークショップなどの事例をリサーチし、2013年には横浜を拠点として市民参加型のアーカイブ実践活動の可能性を考える研究会「地域/映像/アーカイブ研究会」を開く。その成果として、東京都市大学環境情報学部との共催で、第一回「大学・地域連携アーカイブシンポジウム」を開催。市民活動との関係について討議を行った。

アーカイブ構築への市民参加の可能性は、東日本大震災の「記憶」と「記録」を結んでいく地域の活動に関するリサーチへと展開していった。2012年12月にNHK放送文化研究所とともにせんだいメディアテークにて実施したアーカイブ映像の上映ワークショップを機に、仙台、気仙沼を中心としたNPO等の活動との関係が生まれ、特にその中の核となるプロジェクトとしてせんだいメディアテークを拠点とした「3がつ11にちをわすれないためにセンター」とNPO法人20世紀アーカイブ仙台に密着しリサーチを行った。

殊に20世紀アーカイブ仙台のアーカイブ映像上映・古い写真の提示を契機とした市民のコミュニケーション喚起の手法は、「記憶」の言語化を促すスキルとして非常に優れたものと言える。2014年度はその方法を一般に展開可能にするためのシステム（タブレットPC等のインターフェイス）を検討し、メタデータ付与など、「アーカイブ構築」に市民が参加する機会を考察する実験を行った。

夕張は、徐々に地域アーカイブに関する様々なアプローチを重ね合わせる拠点になっていった。2009年2月から始めた年に一回の「国際ファンタスティック映画祭」における「ゆうばりアーカイブ」上映会は、継続していく中で、石炭博物館が所蔵していた映像からテーマを絞り、市民と対話を行う機会としての位置づけが明確になった。

2012年のテーマは、「夕張市が撮ったゆうばり」と題し、市が主体となって制作したPR映像の特性を分析した。2013年は夕張にも残るパテ・ベビー、2014年はダムに沈む「大夕張」の写真と映像を軸に、地域を考えるキータムとしての「風景」を考え、2015年2月はGoogle Earthのインターフェイス上に映像をプロットし、夕張の今を市民参加で記録する呼びかけを行った。その中で、数回にわたって「放送アーカイブ」からの活用を試み、将来の公開に向けてのどのように「ハードル」が乗り越えうるか、検討を重ねた。

現在、手元に集積した「映像群」としては、この地域の研究の出発点となった石炭博物館所蔵映像に加え、シューパロダム管理事務所保存されている鹿島小学校資料を核とした大夕張地域の写真データのコピー、2010年以降「現在進行形」で変化する町の様子を記録したオリジナル映像の三種が中心となっている。これをもと2015年春に試作したインターフェイスなどを用いながら、どのように市民との協働で「アーカイブ構築」を進めていくかに関する本格的な検討に入った。

その点で言えば、2014年は夕張出身の映像プロデューサー今野勉氏が会長を務める「東京夕張会」の活動との連携も始まり、また2015年度には代表者（水島）は夕張市史編纂委員にも就任。これらのポジションを研究に有効に生かすステージに入りつつある。また、岩波書店から2015年度中に刊行予定のシリーズ『ひとびとの精神史』の中で、6期24年に亘って市長を務めた中田鉄治を主題とした原稿を執筆している。これは、後述する「アーカイブが支えとなる歴史記述の方法（本研究のキータムの一つである“ミクロストリア”）」の実践例となるはずである。

パテ・ベビーとの出会いは、夕張市における実践研究から始まった。1930年の日本を写したアマチュア映像は、「ボトムアップ」のアーカイブを構築していく運動のシンボルとなると思えた。「トップダウン」で刷り込まれた戦時イメージに隠され、忘れられたこの時代の市井の眼差しを取り戻すこと。マスメディアのオルタナティブ（ネットワーク・メディア）に歴史性があることを証明すること。「発掘」を通じての参加等々。

富士フィルム・フォトサロンから寄託された愛好会機関誌の分析をベースに2011年から本格的に開始した研究は、小樽市総合博物館、上田市マ

ルチメディア情報センターをはじめとした全国の博物館・図書館等での資料所在の確認、フィルムや実機保有者の発掘とレスキューと進み、2012年には初期段階の研究を総括する論文を学会誌『大正イマジリィ』に発表。これを機に、新潟大学の地域映像アーカイブプロジェクト、神戸大学地域連携事業「映像を媒介とした大学とアーカイブの地域連携」との関係性を深め、各々の数回にわたる連携シンポジウムを開催した。

特に2014年3月、2015年3月の二回に亘って神戸で開催した「大学・地域連携シンポジウム」では、「アマチュア」というポジションに注目し、撮影者と映像システムと地域を相互主体的なアクター・ネットワーク(ラトール)として、あるいは撮影主体を核にそのヴァナキュラーな世界観を記述していく方法論にアプローチできたことが大きい。C.ギンズブルグの提唱する“ミクロストリア”の方法を援用し、現在、関西の森紅、関東における荻野茂二、そしてパテ・ベビーの愛好会を主催した伴野文三郎を核に、研究を進めている。

## (2) 4つの「連携の相」とプロジェクト例

各個別研究から生まれた「成果」は、相互に関連を有し、～を出発点に、他大学、他機関の研究者・実践者による「地域アーカイブプロジェクト」との関係性を開くに至った。そこから得られた知見は「アーカイブとアーカイブをつなげる」と題した小論に整理し発表した(原田、石井編『懐かしさは未来とともにやってくる』最終章)。

今日アーカイブのつくられ方は、実に多様であり、特に地域において構築されるアーカイブは、固有の規模や機能的な制約を有している。しかしそれらは相互に連携することによって拡張可能であり、また機能的にもナショナル・アーカイブとは異なる広がりを持つことが可能である。本研究では、そうしたアーカイブの可能性を拓く「連携の相」を以下の4つに整理した。

A「大きなアーカイブの中に、小さなアーカイブを見出す」 ナショナル・レベルのアーカイブの中に、地域の小規模のテーマと重なる資料群を見出し、その群単位で地域アーカイブの機能を補完する連携。NHKアーカイブスの中から、「夕張」「三陸」といった地域カテゴリーを切り出す発想がこれに当たり、「地域の肖像権」(後述)とともに、公開のロジックを整備していく運動の相。

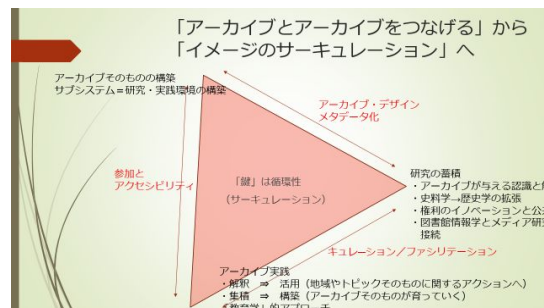
B「小さなアーカイブ同士を結ぶ」 各地域に遍在する小規模な資料群を結び、仮想的にメタ・アーカイブをネットワークで形成する連携。例えば「炭鉱」「戦争」「家族写真」といったテーマによる結びつき。「パテ・ベビー」といった物質的なカテゴリー。あるいは写真を用い想起を行ったワークショップ(C、Dとの関連)を行ったケーススタディー同士の結びつきも考えられる。これらの場合、資料そのものを同じ場所に集約することはできなくても、メタデータを共有するなどして「どこに何があるか」を明示することができる。

C「アーカイブと記憶、アクションを結ぶ」 「記録」と「記憶」の関係性を考えれば、人々の心に収められた「記憶」こそが、潜在的なアーカイブだということができる。反対に夕張や三陸など

記憶を喚起する「風景」が失われた地域では、アーカイブ映像を指し示すことによって会話をつなぐ実践が可能になる。このような「記憶」と「記録」の相互性を踏まえてこそ、アーカイブを公共圏形成に資する重要な装置として位置づけることができ、活用実践の設計がアーカイブと社会をつなぐ役割を担うことができる。20世紀アーカイブ仙台の活動は、まさにこうした連携の相を具現化したものである。またこうした視点は、アーカイブの活用環境の問題(MLA連携=博物館・図書館とアーカイブの施設連携)をも提起する。

D「アーカイブ自体が更新されていく」 アーカイブは単なる過去の記録の保管庫ではない。むしろ過去の記録を、現在を介して未来につないでいく使命をもつ。そうした点を考えると過去のアーカイブに、変化の大きい「いま」の映像を次々追加し、不断にアーカイブを更新する実践と仕組みの構築が不可欠ということになる。「夕張」では、この「いま」を記録し、過去の映像と重ねることを主題として行ってきた。あるいは三陸における諸活動(特に気仙沼市役所や20世紀アーカイブ仙台の活動)は、このことを念頭に、市民参加や複数のアーカイブ活動の連携を既に行っている。

大規模なナショナル・レベルではなく、地域の、手の届くリソースから立ち上げるアーカイブ活動では、網羅性よりも「誰の、何のためのアーカイブか」という目的性が重要になる。目的が明確になることで、他のどのようなアーカイブと、いかにしたら連携が可能か、あるいはどのような機能がそこには必要かといった議論が可能になる。この点も新たな「公共圏論」に資する点といえよう。



## (3) アーカイブの再帰的成長の「三つの極」

こうした視点は、アーカイブ概念を「運動態」として捉える考え方に進む。既に旧来のアーカイブズ学(図書館情報学系のディシプリン)の中においても、フランク・アップワード(1998)を皮切りに多くの研究者が「レコード・コンティニューム(記録連続体)の議論に参加している(E.ケテラール『未来の時は過去の時のなかに 21世紀のアーカイブズ学』入門・アーカイブズの世界』日外アソシエーツ、2006、参照)。

本研究においては、旧来のアーカイブ(公文書館)の機能拡張を分析的に捉えるのではなく、むしろ「システム」「研究」「実践」の三極の機能的な相互作用とそこから生まれる循環運動によってアーカイブが「自ら育っていく」イメージの視覚化を目指した。この「イメージのサーキュレーション」(図)モデルでは、アーカイブの実質を成す映像資料群は、「器」を成す「システム」「研究」「実践」に包まれることによって動的な状態に

置かれる。この三極は、いずれも他の極から各々を成り立たせるリソースを供給され、逆に他の極に必要なものを供給する相互的な関係を成立させることによってその「動性」を担保する。例えばアーカイブを成立させる一つの極である「システム」は、「実践」にアクセシビリティを提供することで、システム構築への参加を開く。「研究」は「システム」から適切な資源を入手し、アーカイブデザインに関する知見を返す一方で、その成果を「実践」の場にキュレーションする。また研究を資源としてファシリテートされた「実践」は、生じる多様なコミュニケーションを資源とした分析をメタデータとしてシステムに返す。

このダイナミズムは、アーカイブ「研究」の本質がメタ情報の生成に奉仕するものであること、さらに「実践」の本質が、集積される資料を取り巻く人々の社会的関係の可視化にあることを浮かび上がらせる。アーカイブの資料には社会関係が折りたたまれているのだと考えるならば、そこに析出されるメタデータは、ソーシャルデザインの重要なファクターであるということができる。

(4) 研究を通じて提示することが出来た、いくつかの「キータム」について。

そもそもアーカイブが研究上の重要な概念と考えられるようになったのは、デジタル技術によるイノベーションの結果である。かつて公文書館の堅牢な壁の中に囲われていた「記録」群は、マスメディア的公共圏の時代を経て、ネット空間の中に開かれるようになった。その結果、「記録」と「記憶」の関係は複雑化する。文書の世界に閉じていた保存すべき「記録」対象は拡張し「映像」などの膨大な情報量を有するマルチメディア資料もその晩列に加わる。その一方で、「記憶」を経ずに自動的に生成される「記録」に囲まれる時代ともなった。こうした反転したGoogle的世界におけるアーカイブの社会的あり方を説明するために、アーカイブズ学は図書館情報学の領域に止まることはできなくなっている。レコード・コンテンツの概念モデルは、まさにその表れである。

前項で説明したように、本研究はその方向性を更に積極的に推し進めたものであるが、その過程において、旧来のディシプリンの壁を乗り越えるために、いくつかのインターフェイス的役割を担う「キータム(概念)」の検討を行った。

( ) アーカイブ体験 認知科学と表象研究(テクスト主義へのアンチテーゼ)

人びとはアーカイブに向かい、映像を群として捉えたときに、意識は個々のテキストに完結せず、それを取り巻くアクターと時空間が浮かび上がってくるという現象を体験する。これが「アーカイブ体験」である。それは、旧来の映画研究を支えてきた作品中心主義の対偶にあるものである。コレクションをカテゴリーや予断を持って選別せず、まるごと受け入れることによって映像の構成素が、まるでハイパーリンクを成すように個別作品の枠を破って相互に結びつきパターンを成し始める。デリダのプリコラージュの概念よろしく、それはまるで資料群そのものが、一定の秩序を自己組織

していく中に、見る者が取り込まれていく状況である。この状況を意図的に実践の中にデザインすることが、教育学的にも求められる(論文)

( ) 集合的記憶の生成 社会学と記号論(記号論の中の時間・空間概念)

「テレビ=集合的記憶装置」とよく言われるが、よく吟味されていない概念である。なぜテレビは記憶を集合化させたのか M. アルヴァックスの「集合的記憶と歴史的記憶」の対立の構図を手掛かりに、A. アスマンらの研究の「歴史が集合的記憶に介入する」時に表れるメディアの機能に注目し、スティグレールの技術論、ムラデノフの「記号論における時間性」の検討を経て、現代社会の「集合的記憶から集合知へ」を説明するに至る。これによって「過去」が「記憶」とともに生産されると仮定することが可能となり、現代社会の「過去」が機能しない(Google的)時代におけるアーカイブの社会性を訴えることができる(論文)

( ) 映像のマイクロストリア 歴史学と情報学(断片に折りたたまれる記号の解析)

イタリアの歴史学者、C. ギンズブルグが1970年代に提唱した「マイクロストリア」という概念の、今日のデジタル映像アーカイブを対象とした分析への援用可能性について検討した。「マイクロストリア」は「新しい歴史学」を構想する方法概念の一つとされているが、その特徴である微視性は、分析の対象である「断片」が外部的に用意された「系(古典的な歴史叙述)」に組み込まれることの徹底的な拒否の姿勢を表すものであり、その点において「新しい歴史学」の本流たるアナル学派とは一線を画す。「断片」自らが語る歴史に耳を澄ますこと、「断片」そのものの中に折りたたまれた周囲との関係性に目を凝らすことなどのギンズブルグの主張は、視覚的痕跡の集積体である映像アーカイブの分析方法にふさわしい態度なのではないかと考え、実際にパテ・ベビープロジェクト(荻野茂二論等)、夕張プロジェクト(中田鉄治論)への適用を試みている(論文)

( ) 風景の政治学 政治経済学と環境理論(地域コミュニティの生態学的意味づけ)

本研究初期の「放送アーカイブ」からの個別テーマの切り出しにおいて注目したのが「風景」の概念である。佐藤健二、オギユスタンベルク、木岡伸夫などの先行研究を渉猟し、単に眺める対象としての「風景」ではなく、映像が切り取られる単位(遠景 中景 近景)各々の表象機能と、送り手 受け手間の解釈系(基本風景 原風景 表現の風景)の弁証法的関係を読み解いた。その結果、「風景」とは、人々の集合的生活空間を指し示す「認識単位」、すなわち「くらし」を「ひとつのまとまり」として把握するゲシュタルトとして定位可能な概念であり、それによって「大きな風景」と「小さな風景」の対立をベースとした政治的なカテゴリーとしても議論しうる(論文)

( ) 地域の肖像権 制度論とコミュニケーション理論(積極的な請求権としての「風景」)

放送アーカイブの公開を拒んでいたハードルの一つに「権利処理」がある。その中でも制度的に厄介な位置づけにあるのが「肖像権」だ。成文法としてではなく、判例の積み上げの中で「拒否権」

として一般化してきたこの概念を、日本国憲法13条の「幸福追求権」を根拠に、集合的生活環境維持における景観訴訟などの事例を参照しながら「請求権」に転換させる考え方を示した。現在は、既存のナショナル・レベルのアーカイブの地域公開への運動を支える主張に止まらず、ヴァナキュラーなアーカイブに関わる活動一般の必要性を訴える考え方として徐々に広まりつつある(図書)。

これらのタームによって、本研究は「新しいアーカイブ学」の構想の入口に立ったといえる。

#### (5) 本研究成果を踏まえた新たな取り組み。

本研究の研究期間は2014年(平成26年)までであるが、既に述べてきたようにそれは、代表者(水島)がそれ以前から取り組んで来た個別研究を総合し、次のステージ(新たな「アーカイブ学」の提唱)に引き渡していくという意味を有しており、その点においては、研究はなお現在進行形にあるといえる。残念ながら代表者は継続して科学研究費の採択には至らなかったが、他の予算、および新潟大学のプロジェクトに研究分担者として参加することによって、2015年度には、新たに以下の取り組みを開始している。

全国の地域アーカイブ研究者・実践者を結ぶ雑誌の発行 『記憶と生活』と題し、電子書籍の仕組みを活用して、2015年度夏をめざし、代表者が発行人となって発行準備中。

大学・地域映像アーカイブシンポジウムの展開と成果の書籍化 既に横浜と神戸(神戸では二年に亘って)で開催したシンポジウムを、2014年度は九州、東北で開催すべく調査と準備を進めてきたが、残念ながら機が熟さず実現できなかった。2015年も新潟大学のチームとの連携をもとに実現を目指す。また神戸の成果は書籍化を検討中。

本研究の成果の単著出版計画(出版社調整中)。

#### 5. 主な発表論文等

[雑誌論文](計6件)

水島 久光「映像アーカイブの教育活用に関する試論」『東海大学紀要教育研究所』、査読有、第22号、2014、pp.1-16

水島 久光「映像アーカイブ分析の方法 ミクロストリアの概念援用をめぐる覚書」『東海大学紀要文学部』、査読有、第101輯、2014、pp.59-78

水島 久光「テレビと集合的記憶のメカニズム メディアと『過去』の位置づけをめぐる学際的探究の試み」『東海大学紀要文学部』、査読有、第99輯、2013、pp.51-64

水島 久光「『記憶を失う』ことをめぐって アーカイブと地域を結びつける実践」『ライブラリー・リソース・ガイド』、査読無、第3号、2013、pp.5-61

水島 久光「遍在する残像 パテ・ベビーが映し出す<小さな歴史>研究序説」、『大正イマジユリ』、査読有、第8号、2012、pp.175-188

水島 久光、兼古 勝史、小河原 あや「テレビ番組における風景の位相 映像アーカイブと日常の亡失に関する一考察」、『東海大学紀要文学部』、査読有、第97輯、2012、pp.53-93

[学会発表](計9件)

水島 久光、原田 健一、北村 順生、榎本 千賀子、椋本 輔「映像のミクロストリア[荻野茂二研究の現在]」『大学連携公開研究会 イメージのサーキュレーションとアーカイブ(神戸大学人文学部主催)』、2015年3月21日、神戸映画資料館(兵庫県神戸市長田区)

水島 久光、今野 勉「ゆうばりアーカイブ2015 みんなでつくる、アーカイブ」『ゆうばり国際ファンタスティック映画祭2015』、2015年2月22日、アディーレ会館ゆうばり(北海道夕張市)

水島 久光「地域のアーカイブについて、今考えていること」『第一回東北メディアラボ公開研究会』2014年12月13日、東北大学片平キャンパス・エスパス(宮城県仙台市青葉区)

水島 久光、原田 健一「地域映像アーカイブ研究と実践 多様なアーカイブをつなぐ理論的アプローチ」『日本マス・コミュニケーション学会2014年秋季研究発表会』2014年11月8日、東洋大学白山校舎(東京都文京区)

水島 久光、濱口 竜介、松本 篤「神戸、地域から見えるもの、そして映像がつなげるもの」『大学・地域・連携シンポジウム「映像・アマチュア・アーカイブ」』2014年3月2日、神戸映画資料館(兵庫県神戸市長田区)

水島 久光「夕張と映像資料」『第六回鹿ノ谷ゼミナール(招待講演)』、2014年1月18日、アディーレ会館ゆうばり(北海道夕張市)

水島 久光、光岡 寿郎、原田 健一、小林 直毅、中村 雅子、上野 直樹「地域映像アーカイブ リレーシンポジウム『アーカイブとアーカイブをつなげる』」『地域映像アーカイブ・大学連携シンポジウム(東京都市大学メディア情報学部開設記念)』、2013年10月27日、東京都市大学横浜キャンパス(神奈川県横浜市都筑区)

今村 文彦、矢守 克哉、三浦 稔、水島 久光「3.11震災アーカイブ活用の可能性~防災・減災・復興に生かすために」『NHK 放送文化研究所2013年春の研究発表とシンポジウム』2013年3月14日、千代田放送会館(東京都千代田区)

北村 順生、原田 健一、水島 久光、北野 央「市民メディアと映像アーカイブ」『第10回市民メディア全国交流集会』、2012年10月28日、上越ケーブルビジョン(新潟県上越市)

[図書](計2件)

原田 健一、石井 仁志編『懐かしさは未来とともにやってくる 地域映像アーカイブの理論と実践』学文社、2013(第14章アーカイブとアーカイブをつなげる 連携の諸相・その必然性 担当)

NPO 知的資源イニシアチブ編『アーカイブのつくりかた 構築と活用入門』勉誠出版、2012(第三部法律と権利、「記録」と「記憶」と「約束ごと」担当)

[産業財産権]

出願状況(計0件) 取得状況(計0件)

#### 6. 研究組織

(1) 研究代表者 水島 久光

(MIZUSHIMA HISAMITSU) 東海大学・文学部・教授  
研究者番号: 30366075

(2) 研究分担者 なし (3) 連携研究者 なし